イイギリの実

山下　俊明
（会員・蒲江町畑之浦）

寒い朝であった。

「先生毎日大変ですね。」声をかける私に、

「毎日が楽しゅうて。」とにこやかに答えられた。蒲江町史編さんに通われたある日のことだ。自宅からバス停まで毎朝六時過ぎ自転車で行くと言う。今朝は丁度いい便があって――そんなことを立話しされた先生は、

「山がなあー毎日変わるんですよ。それを眺めながら蒲江に来るのが楽しゅうて。」私は、返す言葉もなく、心に大きな衝撃を感じた。

轟越えの道すがら今までに見たこともない美しい実のなった木がある。何の木か名は知らない。やむなくその実一房をたおって持ち帰り、その筋の方にたずねたら、それはイイギリの実であった。（このことは、『灯』にも掲載された。）とも話された。

何年もこの山道を通る私は、むとんちゃくに見過ごしていた。それなのに先生の心はこんなにも強い大きな感動を呼んでいる。私は、自分のあわれさを恥じた。

妻と連れだってその木を探したのは翌日であった。久しぶりの二人連れに妻はとても喜こんだ。

「羽柴先生は、草木と話しができるみたい。」と言う妻の言葉に、私は先生の自然愛護と人となりについて、得々として話し続けた。まもなく何かもやもやしていた胸のつかえが消えて行った。

四季折々の風情を楽しむことはあっても、日日うつり行く自然との語らいをもつことなど凡夫な私共にはとうてい及びもつかないことである。人とさからわず、争そわず、さながら行く雲流れる水のごとく、天地を踏まえて生きられた先生を思うとき、ふるさとの山野もさぞ淋しいことであろう。

多くの後輩の方々に人の道を無言のうちに示され自然愛、郷土愛への道しるべを残してくれました。

過日、偲ぶ会に出席させて頂き、富沢氏の先生を偲ぶ一語一語に、あふれ出る涙をどうすることもできませんでした。

昇天され神と永遠の契りを結ばれた先生の生命は不滅であります。郷土佐伯の偉人として、いつまでも語り継

がれ、ふるさとの地に脈々として生きつゞけることでしょう。

あのイイギリスの実が今年もまた紅く輝き、先生の遺徳が偲ばれますように ――。

羽柴先生の思い出

山口 耕司
（会員・佐伯市青山）

五十一年七月農協を停年退職と同時に、染矢勘蔵氏のすすめで、佐伯史談会に加入しました。羽柴先生とは入会以来七回程各地の研修旅行に行を共にしました。先生が旅行の世話をされていられたので、旅行中はいろいろと教えて頂き、僅か五年の短い間でしたが、何十年もおつき合いして来た人のようで、遠慮のない誰とでも気やすく話し相手になってくれる、親しみのあるやさしい人でした。

私は『佐伯史談』に載せるような原稿を書く才能も学識もありません。せめて『佐伯史談』をよむ事により、また研修旅行によって先生方、先輩方の説明を聞き、勉強させて頂き入会した喜びを感じています。

五十三年でした。先生宅を訪れた時、ちょうど『佐伯史談』の原稿を小さい字で一字一句を正確に、ガリ版で切っておられました。暫く見ているうちに、これは大変な仕事だ。この後まだ謄写印刷もあるのだと思い「先生、もう少し会費を値上げして、印刷所に頼んではどうですか」と言いますと、先生は「経費を少しでも安くしたいと今まで頑張って来たが、部数も増えたし、ガリ版印刷も限界に来たようで、近い将来は印刷に頼むようになるでしょう」と淋しそうな口振りでした。

身体の続く限りはガリ版を切って、少しでも経費を少くと、史談会の運営に気を配っておられる様子が、しみじみと伺えました。ガリ版で印刷された『佐伯史談』を見るにつけ、先生の御苦労の姿が浮かんで来ます。

一昨年奥さんもご一緒に、求菩提（くぼて）山の頂上まで登られたあの元気な姿を思い浮かべる時、今は亡き先生なんて信じられません。強い責任感と若い者に負けない情熱と忍耐力、高木会長を補佐し諸先生や会員とも協力し、県内外にまで『佐伯史談』の名を知られるようになった事は、羽柴先生の功績大なるものがあると思います。

長年にわたる御労苦に対し、深甚の敬意を表し、心か